

令和 6 年 5 月 22 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13468

研究課題名（和文）グローバルな環境変動の中の人間 - サンゴ礁関係：メラネシアにおける文化人類学的研究

研究課題名（英文）The Human-Coral Reef Relationship Under Global Environmental Change: An Anthropological Study in Melanesia

研究代表者

里見 龍樹 (Satomi, Ryuju)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：30802459

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、南西太平洋のサンゴ礁に居住する「海の民」と呼ばれる人々における環境変動の体験・認識について民族誌的に明らかにすることを通じて、現代のグローバルな環境変動について人類学的に考察するための方法論を提示しようとするものである。新型コロナウイルス感染症流行の影響で、当初予定していた現地調査は行うことができなかった。その代わりに、これまでの現地調査のデータを再分析し、それに基づいて著書『不穏な熱帯 人間 以前と以後の人類学』（河出書房新社、2022年）を出版した。加えて、サンゴ礁をめぐる科学的知識の動態を把握するために、国内におけるサンゴ礁科学の研究拠点でフィールドワークを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

サンゴ礁は、地球温暖化や海洋酸性化によって多大な影響を受ける「脆弱な生態系」として知られ、現代の環境変動を象徴する生態系と言える。他方で、サンゴと褐虫藻や細菌の共生メカニズムをはじめ、サンゴの生態には未解明な点が多く、さまざまな科学的知見が現在進行形で生み出されている。その意味で、世界各地におけるサンゴ礁と現地の人々の関わりや、その関わりに科学的知識がどのような影響を与えているかを経験的に解明することは、気候変動の時代における人間-環境関係を理解する上で重要な意義をもつ。本研究は、そのような理解に貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to present an anthropological methodology for examining contemporary global environmental changes. This is done by ethnographically elucidating the experiences and perceptions of environmental changes among the "sea people" residing in the coral reefs of the southwestern Pacific. Due to the impact of the COVID-19 pandemic, the originally planned fieldwork could not be conducted. Instead, the data from previous fieldwork was reanalyzed, resulting in the publication of the book "Unsettling Tropics: Anthropology Before and After the Human" (Kawade Shobo Shinsha, 2022). Additionally, fieldwork was conducted at the research centers for coral reef science in Japan to understand the dynamics of scientific knowledge related to coral reefs.

研究分野：文化人類学

キーワード：メラネシア サンゴ礁 人新世 自然 気候変動

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、メラネシア（南西太平洋）のサンゴ礁に居住する「海の民」（アシ）と呼ばれる人々における環境変動の体験・認識について民族誌的に明らかにすることを通じて、現代のグローバルな環境変動について人類学的に考察するための方法論を提示しようとするものである。メラネシアのサンゴ礁は近年、生物多様性がきわめて高い海域として国際的な注目を集めているが、他方で、海水温の上昇によるサンゴの大量死滅が生じるなど、環境変動による生態系破壊が懸念されている。これに対しては、政府や国際 NGO によるサンゴ礁保全プロジェクトが各地で試みられつつある。このようにメラネシアのサンゴ礁は、ローカル/ナショナル/グローバルな諸動向が「社会」と「自然」の両面で交差し合う、人類学的にきわめて興味深い対象となっている。本研究課題は、このような対象に注目することで、グローバルな環境変動をめぐる多様な体験を人類学的に記述・分析する方法論を探究するものである。



図1 マライタ島の「人工島」

研究代表者はこれまで、メラネシアのソロモン諸島のマライタ島でサンゴ礁に人工の島を造って居住するアシと呼ばれる人々について民族誌的な調査・研究を行ってきた。ソロモン諸島は、世界でもっとも高度な生物多様性をもつサンゴ礁海域、コーラル・トライアングルの一角をなしている。アシは、日常的な漁撈活動や建材としてのサンゴの利用を通して、このサンゴ礁という環境と密接に関わりながら生活してきた。他方で、メラネシアを対象とするこれまでの人類学において、サンゴ礁という特徴的な環境が主題化されたことは決して多くない。そのような事情を踏まえ、研究代表者は、上述のような現代的動きの中にあるメラネシアのサンゴ礁に対して現地の人々がどのように関わっているかを、より立ち入って検討する必要があるとの認識に至った。すなわち、海面上昇や海洋酸性化、サンゴの大量死滅といった現代のグローバルな環境変動を、アシはどのように認識し体験しているのか。またその中で、アシのサンゴ礁居住にはどのような変化が生じているのか。そしてこのアシの事例を通じて、現代の環境変動が経験される多様な仕方を考察する人類学的方法論を、どのような形で提示することができるのか。これらが本研究課題の開始当初における問いであった。

たとえば近年のマライタ島では、高潮の際にアシが住む人工の島々が冠水するという現象が生じている。これに対し、一部の人は海面上昇の影響を指摘するが、その他の人は、「かつて島を造った祖先たちが、もはやわれわれを見守ってくれないのだ」といった道徳的な認識を語る。それと同時に、国際 NGO などが主導する保全活動は、サンゴ礁に関わる（それ自体として動的で多面的な）科学的知識をマライタ島にも導入しつつある。このように、メラネシアの人々がローカルな水準において環境変動を体験し認識する仕方は決して一枚岩ではなく、人類学者は、そのように多様な体験・認識とそれらの相互関係について民族誌的に明らかにする必要がある。本研究課題は、そのような民族誌的記述・分析を試み、それを現代の環境変動について人類学的に考察するための一つの方法論として提示するものである。

なお、本研究課題の着想にとってとくに重要な先行研究として以下が挙げられる。

(1) チン、アナ 2019『マツタケ』みすず書房：「自然」（＝マツタケをめぐる生態学的諸関係）と「社会」（＝マツタケをめぐるグローバルなネットワーク）を横断する現代的民族誌として、本研究課題にとって重要な着想源となっている。また、自然科学の現場も含め、世界各地における人間とマツタケの関係をたどり、多地点民族誌の有効性を証明している点でも重要である。

(2) Braverman, Irus 2018 *Coral Whisperers: Scientists on the Brink*, California U.P.：現代におけるサンゴ礁科学・保全活動の実態について人類学的にレビューした画期的な研究である。これに対し、本研究課題は、現代におけるサンゴ礁科学とメラネシアにおけるローカルな知識・実践の相互作用に注目する点において、同書より一段と複雑な研究と言える。

(3) Helmreich, Stefan 2009 *Alien Ocean: Anthropological Voyages in a Microbial Sea*, California U.P.：海洋科学の現場に注目して生命観や自然観の現代的変容を跡付けており、本研究課題の問題意識とも合致する。しかし、著者の議論は現代アメリカ人の自然観・生命観につい

での文化論的な分析に偏りがちであり、本研究課題は、科学の現場により密着することを通して、そうした問題を克服することを目指してきた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1) 独自のサンゴ礁居住を営んできたマライタ島のアシにおける環境変動の体験・認識について現地調査と文献研究を通して明らかにすることを通じて、(2) 現代のグローバルな環境変動について人類学的に考察するための一つの方法論を提示することにある。

3. 研究の方法

本研究課題の開始当初は、ソロモン諸島マライタ島での民族誌的フィールドワーク、国内のサンゴ礁科学および保全活動の現場での科学人類学的なフィールドワーク、および国内での文献研究を主な研究方法として想定していた。しかし、当初計画していたマライタ島での現地調査は、主として新型コロナウイルス感染症の流行により実現が困難になった。数年間にわたって海外渡航が制限された上、その後も、これまでの現地調査の際に利用していた航空路線が国際線・国内線ともに廃止されたことにより、大学の休暇期間中に現地調査を行うことが困難になった。そのため、やむなく現地調査を見送り、これまで(主として2018年)の現地調査で得られたデータの再分析と、国内のサンゴ礁研究拠点での科学人類学的なフィールドワークに専念することとした。

4. 研究成果

(1) 著書『不穏な熱帯 人間 以前 と 以後 の人類学』(河出書房新社、2022年)

2022年、本研究課題の下でのこれまでの研究を総括する著書『不穏な熱帯 人間 以前 と 以後 の人類学』を河出書房新社から出版した。同書では、メラネシアのサンゴ礁という事例に基づき、現代において「自然」をいかに思考し、記述するかという人文学の現代的課題について考察を展開した。その際、主要な理論的文脈として、いわゆる存在論的転回や「人新世」論など、21世紀に入ってからの人類学および関連分野における動きを重視した。

そのような考察に加え、同書は実験的な民族誌記述の方法をも採用した意欲作であると自負している。具体的には、2011年のマライタ島でのフィールドワークの際の一連の驚くべき出来事を、日誌の引用というかたちで通時的に紹介し、そのような出来事的記述を、「自然」をめぐる上述の理論的考察と並行させて展開した。そのような実験的手法により、フィールドワークを通じた人類学的思考の偶有的で出来事的な性格を明示することがねらいであった。なお同書は、人類学の専門分野を超えて広く読者に受容され、2023年には「紀伊國屋じんぶん大賞 2024 読者と選ぶ 2023年の人文書ベスト 30」にも入選した。

より具体的には、同書は以下の三部構成をとっている。

他者：1980年代における『文化を書く』の論争や、21世紀に入ってからのいわゆる存在論的転回の議論などを踏まえ、現代においていかなる人類学・民族誌を実践すればよいか、また、一見古典的に見えるマライタ島でのフィールドワークがいかにして現代的な研究となりうるかについて反省的に考察した。

歴史：マライタ島のアシが住まう「人工島」の大部分が、実は西洋世界との接触以後に新たに形成されたものであること、また、それらの島々に関わる歴史が、現代のアシにおいてしばしば想起・証言困難になっていることを指摘し、アシの歴史意識が帯びている他者性や偶有性について指摘した。

自然：「人新世」が語られる現代において、近代的な「自然」観からはみ出ていく「自然」をいかにとらえ、記述することができるか。本書ではこの問題を、近年の人類学や関連分野において影響力があった、「自然的かつ社会・文化的な関係性の広がりをつとめる」という関係論的な様式からいかに距離をとるか、という理論的・方法論的問題として考察した。具体的には、アシの人々における「自然」(と呼ぶべきもの)についての意識を、そのような関係性から脱落する外部性についての意識として分析し、現代の人類学・民族誌の課題を、そのような外部性としての「自然」について非近代的なかたちで思考することとして定義した。それが、本研究課題の理論面での一つの到達点である。

(2) サンゴ礁科学の現場での科学人類学的フィールドワーク

上記の著作は、存在論的転回や「人新世」論などの議論を踏まえ、現代における「自然」の立ち現れについて真摯に考察するものであった。しかし他方で同書は、サンゴ礁という対象を主としてマライタ島の人々の語りにも即して考察するものであり、一面では古典的な「文化」論にとどまっていた。同書の執筆の過程で、研究代表者は、現代における各地の人々とサンゴ礁の関わりに対して、より実在論的にアプローチすることが求められていると考えるようになった。そのような認識に基づき、とくに2023年度は、国内のサンゴ礁科学の現場での科学人類学的なフィールドワークに注力した。そうすることで、上述の通り特徴的なサンゴ礁という「自然」に対して、

より多角的にアプローチすることを試みた。

2023 年度は、国内のサンゴ礁科学の現場（琉球大学理学部、琉球大学瀬底研究施設、沖縄科学技術大学院大学、東京大学大気海洋研究所など）での科学人類学的なフィールドワークを精力的に行った。また、日本サンゴ礁学会でポスター発表を行い、国内の研究者たちと積極的に交流した。

現代のサンゴ礁科学や保全活動をめぐっては、Braverman による先行研究（上掲）において、「手つかずの自然を守る」という従来型の保全から、「積極的な人為的介入」という現代的な形態への転換が指摘されていた。しかし、2023 年度の国内での科学人類学的な調査からは、国内の研究者がサンゴ礁への人為的介入に対して必ずしも積極的でないことが明らかになった。このような相違を掘り下げることを通じて、現代のサンゴ礁をめぐる多様な動きとその基底にあるさまざまな「自然」観について人類学的に考察することができるだろう。また、今後の海外での現地調査により、現代のメラネシアにおいて展開されているサンゴ礁保全プロジェクトが、いかなる「自然」観に基づいて行われているかを検証することも期待できる。今後、本研究課題の成果を発展させ、図書や論文のかたちで積極的に発信していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 里見龍樹	4. 巻 22
2. 論文標題 序論 Writing (Against) Nature 「転回」以後の民族誌	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文化人類学研究	6. 最初と最後の頁 1, 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 里見龍樹	4. 巻 85, 3
2. 論文標題 「戦闘の時代」の島々：ソロモン諸島マライタ島の初期植民地時代をめぐる歴史人類学的考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 397, 415
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.85.3_397	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 里見龍樹	4. 巻 126
2. 論文標題 マリリン・ストラザーンにおける イメージの方法	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本オセアニア学会ニュースレター	6. 最初と最後の頁 1, 18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 里見龍樹	4. 巻 47(6)
2. 論文標題 人類学存在論的転回 他者性のゆくえ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 117, 122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 新川奈緒、里見龍樹
2. 発表標題 サンゴ礁への人類学的アプローチ
3. 学会等名 日本サンゴ礁学会第25回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 里見龍樹
2. 発表標題 「沈む島」と「育つ岩」：ソロモン諸島マライタ島北部のラウ / アシにおけるサンゴ礁居住の動態
3. 学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryuju Satomi
2. 発表標題 The Equivocation of 'Sinking Islands': An Ethnography of Climate Change from North Malaita, Solomon Islands
3. 学会等名 AAA/CASCA Annual Meeting 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新川奈緒、里見龍樹
2. 発表標題 サンゴ礁科学に見る人新世の「自然」：人類学的アプローチ
3. 学会等名 日本サンゴ礁学会第26回研究大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 檜垣立哉、山崎吾郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 260
3. 書名 構造と自然	

1. 著者名 里見龍樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 450
3. 書名 不穏な熱帯：人間 以前 と 以後 の人類学	

1. 著者名 杉島敬志	4. 発行年 2019年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 360
3. 書名 コミュニケーション的存在論の人類学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------